

未の満水

【未の満水】とは

300年前の1715(正徳5)年6月、梅雨時の長雨にともなう豪雨によって天竜川流域に甚大な土砂災害がもたらされました。この年が未年であったため、「未の満水(※)」と呼ばれています。1715(正徳5)年、梅雨時の6月17日から降り始めた雨は、18日早朝から豪雨となって降り続き、被害は天竜川や支川流域一帯に及びました。川路や高森町では、天竜川が増水して諏訪湖のような満水となり、飯田城下では死者32名、流家118軒、堤防破損2580間という被害の記録が残っています。この災害は1961(昭和36)年6月に伊那谷を襲った三六災害を上回る災害規模であったと推測されます。



高森町では大島川から流れ出した土石流が天竜川をせき止め、濁流は4km上流の竜の口まで満ち溢れ、出砂原から台城までが諏訪の海のようになっていました。(図：『山吹藩史料』を参考に作成)

※【満水】
満水とは、昔の洪水の呼び名。

伊那谷には川幅の狭い狭窄部が多くあり、川があふれて湖のようになる災害がたびたび起こった。

『飯田世代記』より 野底山史に記されている『飯田世代記』には、野底を襲った土石流の様子が記録されています。

正徳5年未年6月17日から3日間降り続いた豪雨で、大小河川は水量を増して氾濫し、各所で被害が発生した。

松川、天竜川の水も溢れ、田畑を押し流している時、野底川は、濁った水が太いうねりをなしているだけで安全だった。すさまじい雨水が、どこへ流れて行くのだろうと不思議に思うくらいだった。

本来ならば山崩れを直覚し対応処置を執るべきところ、当時の村人達はのんきにかまえ、むしろ野底川に出水の少ないのを喜ぶ様子だった。20日になって拭ったように雨が上がり晴天となり、別府村、上・下黒田の人々は、老人・子供を留守居に残して野良仕事に出た。

その昼下がり、瞬刻にして地獄絵を見るような惨状を露呈しようとは夢にも知らず、大雨で崩れた田の畦、畑作物の手入れ、屋根や、垣根の修繕などを行っていた。

降り続いた豪雨で、山の地殻に緩みを生じ、一つの峰が崩れ落ちた。大きな湖面に濁水が満ち溢れると、堤の一角は崩れ始め、満々とたたえた水は、凄まじいうねりを生じ、低木の樹木も、岩石も一呑みにして溢れ出た。

村人は遠雷を聞くような轟を聞いても、雨上りの仕事に追われ深く気にとめる者もいなかった。

すさまじい地うなりに伴い大砲の轟くような響きを聞き「ヤッ、でかい山津波だ!」と知った時は遅かった。田も、畑も、人間も、獣畜もまたたくまに呑み尽くした濁流は、野底の流れの十数倍にもわたる広い範囲で襲ってきた。

田や畑に居た者は、大急ぎで高台へ逃げた。逃げ遅れた者、又は我が家へ置いた老人、子供を気遣って引返した者達は、家もろ共に濁流にさらわれた。

野底山から押し出され、下流の川底になった別府地籍の天王原に残る大石が、この時の洪水、氾濫が如何に甚大なものであったかを物語っている。

